

井上浩一著

『生き残った帝国ビザンティン』

近年、ようやく活況を呈するようになって、我が国のビザンツ帝国史研究において、常に牽引車の役割を果たしてこられた井上浩一氏の手で、邦語によって初めてビザンツ一千年の歴史を通覧できる手頃な概説書が著わされたことは、同じ道を志す者のひとりとして慶びにたえない。本書に先行して、同じ新書版で出た渡辺金一氏の『コンスタンティノープル千年』（岩波書店、一九八五年）が古代ローマからビザンツへ連続と受け継がれた原理の不変性・一貫性を強調し、皇帝選出の作法を軸とするその議論のなかで触れられる数々のエピソードも、年代的序列に特にこだわることなく扱われているのに対し、今回の井上氏の著作は、ローマという伝統を守りつつ、現実に対処すべく自己革新を続ける帝国の姿を時代を追って叙述しており、ビザンツの興亡の過程をかいつままで頭に入れてしまいたい初

学者にとつては、こちらの方がありがたいかもしれない。

話を本書の内容に戻そう。それは、帝国史の節目ごとに重要な役割を演じた皇帝の事蹟を中心に展開されている。帝国のキリスト教化の道を拓いたコンスタンティヌス、ローマ帝国再興を夢みたユスティニアヌス、国家存亡の危機に果敢に立ち向かったヘラクレイオスとレオン三世というように。とりわけ、オスマン・トルコによる軍事的圧力とイタリア諸都市の経済的支配が強まるなか、帝国の頹勢を挽回すべく苦闘する文人皇帝マヌエル二世パライオロゴスの姿は感動を誘う。これ以外の箇所でも著者は豊富なエピソードを織り混ぜ、もはやこの世に存在せぬビザンツ帝国の様々な断面を読者の前に鮮明に描き出すことに成功している。

しかも、それは単なる皇帝列伝風の読書の域に甘んじることなく、たとえば第四章では帝国の官僚制、教育制度、農村共同体、そして巧みな外交術にまで話題が及び、ビザンツ国家が強い生命力を誇った背景を、無理なく理解できるよう配慮がなされている。

ただし、一般向けの新書という本書の性格上いたしかたないことではあるが、著者のより詳しい説明や、もっと踏み込んだ議論を耳にしたい、と思う箇所も少なくなかった。ここでは紙幅の都合上、以下の三点を例示するに留めておく。

第一に、ユスティニアヌス治世中の最大の危機であったニカの乱に関して著者は、専制君主に断固として戦った民衆、などというかつて見られた素朴な階級闘争史観と一線を画し、首都市民自体、「パンとサーカス」に生きる退廃的で歴史に逆行する存在であったことを的確に指摘している。

そこで気になるのは、井上氏がかつて「市民闘争」と形容し、積極的にその意義を認めた十一世紀と十二世紀後半の首都の民衆蜂起をめぐる現時点での氏の評価である。帝国全土から吸い上げられた税収の大半が消費される大都会コンスタンティノープルに暮らし、自らの特権的地位が脅かされるのに神経をとがらせるこの時代の首都市民の態度は、ニカの乱当時と大差はないように私には思えるのだが。

第二に、著者は八世紀の聖像破壊論争の本質を説明するにあたり、古代の地中海・

オリエント世界の神をオリエント型とギリシア型に二分し、前者は「古代エジプトやバビロニアの神のように、全知全能で、近づきたい超越的な神である。このような神は、人間にはその意志をはかり知ることではできず、その姿を描きだすことも不可能である。描くこと自体、神に対する冒瀆である」と述べている(一三四頁)。しかし、神の具象的表现にのみ、ことを限定して言えば、古代エジプトの壁画や彫像の類を見る限り、当時のエジプト人にそのような觀念があったようには思えない。聖像破壊論争をオリエント的なものとギリシア的なものとの対決と捉える通説自体、今日では見直しが迫られているようだが、これに關しては今後さらに議論が深められることが望まれよう。

介
三点めは、第四回十字軍のコンスタンティノープル占領後に成立したビザンツ系亡命政権をめぐる問題である。井上氏の原著『ビザンツ帝国』(岩波書店、一九八二年)では、この時期はほとんど触れられていなかっただけに、本書のこの箇所の記述は、いっそう興味深いものになっている。氏は、首都陥落が即座に帝国の完全な滅亡をもた

らざなかつた理由として、在地に強固な支配権を確立した地方貴族が主体となって頑強な抵抗を行なったことを挙げている。ところで、フランスのビザンティニスト、シエイネの近著(J.C. Cheynet, *Byzantins et Constantinople a Byzance (963-1210)*, Paris, 1980, p. 468) によれば、帝都陥落直後に旧帝国領内各地に独立した支配権を樹立した十五のギリシア系君侯領のうち、一二年一年まで命脈を保ったのはニカイア、トレビゾンド、エペイロスという旧ビザンツ中央政府の後継者を自認する三國家のみであった、という。つまり、在地での支配権を擁護所に成立したギリシア系小國家の多くがその権力を永続化しえず、数年を経ずして消滅していったのである。それでは、消えていったこれらの領国と、前記三國家の運命を分けたものは何だったのか。ニカイア帝国に關して井上氏も論及している「ローマ」意識とキリスト教のイデオロギーの存在か、それとも中央政府の旧関係者のみが保持しえた優れた行政的手腕なのだろうか。氏のより詳細な解説を伺いたいのは、この点である。

もとより、これらの疑問や要望に新書の

限られたスペースで充分に答えることがほとんど不可能であることは、私としても承知している。さいわいに我々は、氏が「社会史」的視角からビザンツ社会の全体像を描き出すことを目指した次回著作の構想を抱えていることを知っている(井上浩一「ビザンツ社会史をめぐる」、『歴史科学』九九・一〇〇合併号、一九八五年、四五頁)。そのときにこそ、今回では語りつくせなかつた氏の卓抜したビザンツ社会の解釈が我が目の前に展開されることになろう。その点で、今回の新書版の著作は、氏の次回作への我々読者の期待感をいっそう高めた、という点で、次回作への序論、予告篇として、充分、その使命を果たした、と言うことができるのであるまいか。

(新書版 二五四頁 一九九〇年十二月
講談社 六〇〇頁)
(根津由喜夫 富山大学講師)